第　受付　号
7.3.31
東かがわ市議会
事務局

様式第４号（第７条関係）

令和７年３月３１日

東かがわ市議会議長
　渡邉　堅次　　様

東かがわ市議会議員
（会派・個人・その他）
氏名　久米　潤子

行政視察等報告書

1	日　時	２０２５年３月２７日(木)～３月２８日(金)	
2	参加者	久米　潤子	
3	研修目的等	内　容	研修場所
		防災対策と復興への取組について (施設視察及びラーニングプログラム受講)	宮城県南三陸町 (南三陸３１１メモリアル)
4	研修・調査内容	別紙参照	
5	研修成果	別紙参照	
6	費　用	96，780 円	

※領収書(交通費･宿泊費の明細が分かるもの)、研修資料を添付してください。

【研修・調査内容】

南海トラフ地震の発生確率が高まる中、東日本大震災から 14 年が経過した 2025 年 3 月、防災対策と復興への取り組みを学ぶため宮城県南三陸町を訪れた。

視察研修先の**「南三陸 311 メモリアル」は、「南三陸町東日本大震災伝承館」**であり、隈研吾さんの建築である。施設内には、瀬戸内国際芸術祭とも縁のあるフランスの現代美術家クリスチャン・ボルタンスキーさんのアート作品が展示されており、命の尊さを静かに訴えていた。外構作品の石村大地さんの作品は、震災で亡くなられたのは人だけではないとの想いから、大きなうさぎの体にたくさんの動物が描かれていた。アートの持つ、心の一番奥にまで語りかける力、光を届ける力をあらためて実感したところである。

施設内エントランスの**壁面には、南三陸町の立体的な地図と共に、南三陸町が経験した過去の津波の高さが地域ごとに表示されている。2011 年の東日本大震災の津波が群を抜いて高いことがわかる。**壁の左端には、床から平安時代から令和の地震の記録まで記されており、大地震の間隔はおおよそ 30㎝ごとに刻まれていた。東日本大震災以降は、大きく未来の災害と記されていた。**世界有数の地震大国である日本で、今と未来を生きる人々に、東日本大震災の教訓を伝える施設である。**

27 日 16 時から、ラーニングプログラムの受講を開始した。ラーニングプログラムでは、住民の証言映像を視聴しながら、「もし自分がそこにいたら、どう考え行動するのか」を対話タイムを通じて考える。

ラーニングプログラム②「そのとき命が守れるか」では、自治体が描く防災計画はあくまで計画である。日頃の訓練をもとにしながら、「想像し→次の手を考え→判断する」という思考を、個人、家庭、地域、事業者、学校、そして自治体のそれぞれが、自らの命を守る力として、磨いていかなければならない。自分の命を守らなければ、他人も守れないことを教えて頂いた。

28 日 8 時 45 分から、ホテルが運行する**語り部バス**に 1 時間乗車した。あの日から止まったままの中学校の時計や、震災遺構である高野会館、防災対策庁舎、そして 10 メートル嵩上げされた町の姿と、語り部さんのお話に、本市の誰一人にもこのような思いをしてほしくないと感じた。

10 時 30 分から 13 時 05 分まで、さらに 2 つのプログラムを受講した。**ラーニングプログラム①「生死を分けた避難」では、**必ずやってくるその日その時にどう行動するのか、日頃から何度も話し合うことの大切さを教えて頂いた。

防災訓練、避難訓練を行なった後の話し合いが、生死を分けることになる。決して学校に限られたことではなく、個人、家庭、地域、事業者、自治体、命があるすべての場所で、避難について話し合いを続けていくことが重要である。

ラーニングプログラム③「いのちを想う」では、非常時に人は冷静な判断ができなくなる傾向がある。任務に当たるすべての消防士が「リスクアセスメント」を行い、全員が 100%救出できると思った時に行動するとしている。それは、自治体職員も同じである。100%助かる前提がなければ危険なところに助けに行ってはいけない。他にも、人が持つ特性として、危険な状態でも自分は大丈夫だと信じる「正常性バイアス」が避難行動を妨げる。避難した先に、大勢の人がいる安心感から、危険を察知できない「同調性バイアス」にも注意が必要である。

また、このプログラムでは、東日本大震災当時の子どもたちが心にしまった悲しみと、それでも前を向き生きる成長記録や、漁業関係者が、目先の収益でなく、持続可能な未来を生きる人々により良い環境を残そうと懸命に取り組む、海の復興から生まれたブランド牡蠣「戸倉っこカキ」やブルーカーボン事業の話に感銘を受けた。東日本大震災は人間の小ささを教え、そして逞しく蘇ることも教えてくれたとプログラムは結ばれていた。

【研修成果】

実際に足を運び、自分の目で耳で心で、南三陸町で出会った方々から震災の恐ろしさ悔しさ、そして復興への取り組みを教えて頂く貴重な研修となった。

「あの日の朝は、普段と変わらない一日の始まりだった。」「あの日ほど残酷な星の輝きを見たことはない。」との言葉がずっと心に残っている。ラーニングプログラムと、震災遺構は、今も何をすべきか語り続けている。

全プログラム３つを受講し、社会教育士としても、大変学びの深いプログラムであると感じた。あわせて、震災を経験した施設職員の方々の姿勢やお話から、今後の防災対策への誓いを新たにしたところである。

・家庭、地域、事業者、学校、そして自治体に、自分の命を守らなければ、他人も守れないとの啓発を行いたい。

・個人、家庭、地域、事業者、学校、自治体、命があるすべての場所で、防災訓練、避難訓練を行なった後に、話し合いを行うことを推進してまいりたい。

・非常時に人は冷静な判断ができなくなる傾向がある。本市の職員をはじめ、使命感の大きい職種や、任務に当たるすべての人、団体、事業者に「リスクアセスメント」の重要性を訴えてまいりたい。

この度の学びを、東かがわ市の子どもたちをはじめ、今と未来を生きる皆さんの生命を守る取り組みとして広く強く推進するため、南三陸町から講師をお招きした防災講演会を提案してまいりたい。

※写真掲載の許可は得ています。